

教育と社会移動研究における関係的思考様式の適用可能性

——P. ブルデューと D. メルリエの議論展開を追って——

大 前 敦 巳*

(平成7年10月31日受理)

要 旨

本稿は、フランスで P. ブルデューと D. メルリエを中心に展開された、教育と社会移動研究における関係的思考様式の適用可能性について検討する。

一方でブルデューは、従来の社会移動研究の多くが依拠する実体的思考様式に代わって、要素間の関係それ自体を取り上げる関係的思考様式に移行する必要があることを主張する。それを理論的に顕現させたものが、「社会空間」という概念であるが、彼はこの理論的構築を企てる際に、従来の社会移動研究とは「縁を切る」ことを代償にしてみよう。

他方でメルリエは、社会移動研究に内在する問題を批判的に検討することによって、関係的思考様式を社会移動研究に適用する可能性を探ろうとする。彼は、移動表の分析を中心に社会移動研究が展開した文脈を歴史に遡って明らかにし、移動表などのカテゴリー分類を所与とみなさず、その社会学的に有意義な関係を「構築する」ことをめざす。

教育と社会移動研究との関連においては、彼らが提唱する関係的思考様式は、「教育システムの相対的自律」の問題に結びつく。相対的に自律した教育システムを通して、どのような社会的関係の距離が短縮したり遠ざかったりするの、それによって社会的関係の意味にどのような変容が見られるのか、そうした問題に焦点を当てた分析の可能性が開かれる。

KEY WORDS

mode de pensée relationnel

éducation et mobilité sociale

tableau de mobilité sociale

classement des catégories

construction savante de la réalité sociale

autonomie relative du système d'enseignement

関係的思考様式

教育と社会移動

社会移動表

カテゴリー分類

社会的現実の学問的構築

教育システムの相対的自律

1. 問 題 設 定

現在では多岐に専門分化した社会階層・社会移動研究の中でも、教育と社会移動の領域は、他の下位領域以上にフランスで行われた研究が多く参照されてきた。とりわけ、ブルデュー・パスロン『再生産』（1970）、ブードン『機会の不平等』（1973）は、その代表的なものとして挙げることができる。本稿では、フランスで社会学の研究を行う P. ブルデューと D. メルリエを

* 教育基礎講座

中心に展開された、教育と社会移動に関する経験的研究の方法論に焦点を当て、従来の方法とは異なるその特異性を明らかにし、その具体的な適用可能性について検討する。

社会階層・社会移動研究の展開においては、フランスの社会学は、「産業社会」という共通した社会的基盤を持つにも関わらず、英米・北欧諸国に比べて遅れて発展した。もちろん、後発とはいえこの国でも、一方では国立統計経済研究所 (INSEE) を中心に、社会移動に関する経験的データの収集・分析が行われている。そこでは、「職業形成・資格調査 (les enquêtes Formation-Qualification Professionnelle)」と呼ばれる全国サンプル調査が実施され、「社会職業カテゴリー (les catégories socio-professionnelles)」という職業分類が作られている。しかし、他方ではおそらくその後発性のゆえに、同じ経験的研究を行うとしても、従来の社会移動研究を批判する形となるケースが現れる。本稿で取り上げるブルデューとメルリエは、その批判をはっきりと前面に押し出す立場にある。

たとえば、ブルデューは、『ディスタンクシオン』(1979) の中で行った試みについて、次のような回想を述べている。「私たちは社会階級について純粋な(かつ厳しい)理論と経験的な研究との二者択一の前に立っています。しかし、一方で、純粋な理論には拠って立つべき経験的データ(生産諸関係での位置など)がありませんし、また、純粋理論は、じっさいには社会構造あるいはその変化の状態を記述するための有効性をまったくもちあわせていません。他方、国立統計経済研究所の仕事のような経験的研究は、それを支えるべき理論がありませんが、いろいろなクラスへの区分を分析するために使える唯一のデータを提供してくれます。私としては、社会階級の理論と社会階層化の理論との間の神学的対立 (opposition théologique) として扱われてきたようなことを乗り越えようと挑戦してみました。」(Bourdieu [1980=1991: 68])

また、社会移動研究をはっきりと問題の対象に置いたものとしては、D. メルリエが、ブルデューの研究の継承・発展を試みている。水島 (1994: 485) によれば、P. シャンパーニュ、D. メルリエ、R. ルノワール、L. パントの共著である『社会学のプラティック入門』(1989) は、ブルデューらが著した『社会学者のメチエ』(1973) の新版ともいえるべき本であり、その著者たちはいずれも、ブルデューの着想を引き継いで展開する仕事をしている社会学者であると紹介されている。

ブルデュー、メルリエらに共通する方法論の特徴は、実証主義に依拠する多くの研究が前提する「実体的思考様式」に代わって、「関係的思考様式」に基づいた経験的研究を推し進めることにある。本稿では、どのようにすればその関係的思考様式を教育と社会移動研究に適用することができるのか、ということを主題にして、次の作業を行う。(1)ブルデューとメルリエが、関係的思考様式に基づいて、どのような経験的研究の方法論を展開したのかについて整理する。(2)彼らの方法論が、教育と社会移動研究の中で、どのような問題を解明する可能性を持つのかについて検討する。

2. ブルデューの社会移動研究批判

この節では、ブルデューが、方法論的な観点から従来の社会移動研究に対して、どのような批判を展開しているのかについて整理することにしたい。これまでの社会移動研究の多くは、独立変数や従属変数など諸変数を操作的に定義し、それらの間の統計的関係を数量的に測定しようとする、いわゆる実証主義と呼ばれる立場に基づいてきた。しかし、ブルデューは、「統計

の関係というのは、真実を内に秘めた意味論的關係を表わすと同時に隠しもするものである」(Bourdieu [1979=1989: 29])という点に注目して、この統計的關係自体にいったいどのような意味があるのかという点を問題に取り上げる。この問題が、実証主義に対する彼の批判の中心になる。

2.1. 実体的思考様式から関係的思考様式へ

ブルデューは、従来の社会移動研究の多くが基づいている実証主義には、次のような問題点があることを指摘する。

第一に、実証主義は「指標の名目上の同一性 (identité nominale des indicateurs)」に信頼を置くために、測定した統計的關係を解釈するときに、どうしても直観主義に頼ってしまう危険性がある。つまり、操作的に定義した変数や要因を示す指標や用語が名目上同一であると、これらの変数や要因それ自体が同一不変であるという幻想が生まれてくる可能性がある。また、指標の社会的意味を前もって分析しておかなかったために、見たところきわめて厳密な調査資料が、これを社会的に解釈しようとするときにまったく不適当なものになってしまう可能性もある。たとえば、ブルデューとボルタンスキーは、社会移動研究が前提にしてきた次のことに疑問を發している。「社会移動の研究とその歴史的比較はすべて、究明の中心となるべき問題をむしろ前提にする。それはことばと事物、学歴=資格 (le titre) と地位 (le poste) との關係の永続性という問題である。いったい1880年の小学校教師を1930年や1976年の小学校教師と同一視することになんの意味があろう？小学校教師の息子は、息子自身が成人して小学校教師になった場合のそれと同じ意味での小学校教師の息子であるというのは本当だろうか？名目的な同一性は実質的な乖離を隠蔽してはいまいか？」(Bourdieu, Boltanski [1975=1985: 63])

第二に、第一の問題から派生して、実証主義は、測定された統計的關係を説明する際に、個別に切り離された要因に説明力を求めてしまう要素還元主義を導く危険性がある。このことは特に、「説明要因 (facteurs explicatifs)」を突き止めようとする場合に当てはまる。それは、「職業や年齢、性別、学歴など、行為者に結びついた諸特性をそろそろの力 (forces) として、それもどのような關係のなかでそれが『作用する (agir)』のかということとは切り離された力として、扱う。」(Bourdieu [1979=1989: 35]) 社会移動研究においては、この問題は、次のような形で現れることが指摘される。「社会移動の諸理論は、個人の移動を行為者を生産する装置 (教育システム) の変化がもたらす部分と、職業的な地位構造つまり経済装置の変化がもたらす部分とに還元する。この簡略化された唯物論はテクノロジカルな決定論しか認めない。それはある機構にかなう者の職業を根底で変化させる原因が、唯一その機構の変化にあるとみなす。」(Bourdieu, Boltanski [1975=1985: 63])

これらの危険性を免れるために、ブルデューは、諸変数間の「關係それ自体を対象としてとりあげ、しかもそれが統計学的に意味しうることを問うのではなく、その社会的な意味をこそ問いかける」(Bourdieu [1979=1989: 36]) 作業をすることを要求する。このことを言い換えれば、「ある『独立変数』とある『従属変数』との統計的關係のそれぞれを前にして、『従属変数』が示すものの知覚・評価のされかたが『独立変数』の決定する行為者集合によってどう変化するか、あるいはこう言ったほうがよければ、行為者の各集合が実際に決定されるにあたって、これを方向づけてきた関与的特徴の体系とはどんなものであるのか」(Bourdieu [1979=1989: 157-158]) をはっきりさせることを意味する。つまり、操作的に定義された変数を文字

通り名目上の意味をもつ要素とみなす実体的思考様式から、個別に切り取られた諸変数の一義的な意味の下に、直接には見えなくなった関与的諸特性の関係の構造を見出そうとする関係的思考様式に移行する必要が説かれる。

もう少し説明を付け加えれば、ある変数によって切り取られた特性は、その名目上の定義のみによってではなく、そこに組み込まれている「二次的特性 (propriétés secondaires)」あるいは「補助的特徴 (caractéristiques auxiliaires)」によっても、その意味が規定されていることを考慮に入れなければならない。すなわち、「中心となる変数によって切りとられた集合のなかにさまざまな二次変数 (性別・年齢など) がもちこむ下位区分やヴァリエーションを分析することによって、その集合の実質上の定義には確かに含まれていながら、名目上の定義、つまりその集合を指すのに用いられる名称に集約される定義においては、したがってその集合が組みこまれる諸関係の解釈においては必ずしも意識的には考慮されていないすべてのものについて、問うてみる必要がある」となる (Bourdieu [1979=1989: 162-163])。たとえば、ある職業集団に結びついた年齢、性別、出身階層、人種などのような二次的特性は、しばしばその職業の社会的価値 (威信または不評) を決定する根拠となり、その具体的な例としては、女医や女性弁護士が女性客専門になってしまったり、黒人の医師や弁護士が黒人客専門、あるいは研究専門になってしまったりするケースを挙げることができる。

以上のような思考様式は、フランスの統計学者であるバンゼクリ (J. P. Benzécri) の次の文章をブルデューが引用することによって簡潔に要約されている。「 $\alpha\beta_1\gamma_1, \alpha\beta_2\gamma_2, \dots, \alpha\beta_n\gamma_n$ のように、各々が三つの特徴 (または性格) を備えたものとして示される何人かの人間がいるとしよう。各記号表示からあと二つの要素 $\{\beta_1\gamma_1, \dots, \beta_n\gamma_n\}$ を捨象した場合、これらの人間たちはすべて α という特徴によって定義される同じ一つの種に属することとなり、結局これをまとめて α 種と呼ぶことができるであろう。しかしたとえ特徴 α によってこの種を定義し、そこに属する人間を認識することができるとしても、これら個々人のもつ他の特徴 β や γ を考慮することなしに、この種の研究をすることはできない。この観点からすれば、第二の特徴がまというるさまざまな様相 β の集合を B、第三の特徴がまという様相 γ の集合を C とそれぞれ示した場合、 α 種を研究することは αBC を研究すること、つまり固定した第一の特徴以外に、第二の特徴 (B) および第三の特徴 (C) でありうるようなすべての要素をも合わせて研究することになるだろう。そしてこれはさらに、あとの二つの要素間で成りたちうる連合関係 (ある β にたいしては γ' や γ'' よりも γ がより強く結びつくといったような) を研究することにもなるであろう。」 (Bourdieu [1979=1989: 418-419])

さらにブルデューにおいては、この考え方を採用する場合、共時的な関係に加えて、通時的な関係を組み入れることが重要な意味をもつ。共時的には同じ社会的位置を占める者であっても、彼らが通時的にどのような経歴を歩んできたのかによっては、その社会的意味が異なるからである。ブルデューの概念を用いれば、この違いは「社会的軌道 (trajectoire sociale)」の違いとして表現される。「ある集団内では、現在その人が置かれている状態とは異なった生活条件の反映効果が、あるいは結局同じことになるけれど、その集団内で最も多く見られる典型的軌道とは異なった社会的気道がついに表に出てしまう礼儀作法のような微妙な指標にもとづいて、成り上がり者や没落者たちをそれと見分ける感覚というものがある存在しているが、ある時点で同じ特性をもち、同じ社会的位置を占めてはいても、もともとの出発点では別々であった行為者たちのプラティック〔慣習行動〕を比較する統計学的分析も、ちょうどこれと似た操

作をおこなうのである。」(Bourdieu [1979=1989: 171])

しかし、この通時的関係を把握するのは容易なことではない。まず、一定の社会的位置とその位置を占めるよう導いていった軌道との間には、強い相関関係があると考えられるが、それでも一定の蓋然性で他の軌道を借用しながら元の位置から逸脱するケースも必ず現れるのであり、そうしたケースはきわめてつかみにくいものになる。次に、個人的軌道だけでなく、集団的軌道の効果が作用する場合もあり、たとえばある階級内の一部の人が、その集団全体の軌道とは逆方向の個人的軌道に乗ってしまうこともありうるために、分析はこみいってしまうことになる。そうした困難はあるのだが、共時的関係だけでなく通時的関係を考慮することによって、従来の社会移動研究では目を向けられなかった側面に注意することも可能になる。たとえば、ある条件のもとでは職業の世襲を最小限に切りつめることによって、社会構造の再生産を企てるケースもあることが示される。「行為者たちが、社会構造における自分の位置(position)と、自分に与えられた序列を示す諸特性を、身分(condition)の変化に結びついた転移(たとえば小土地所有者の身分から下級官吏の身分への転移とか、小職人の身分から事務員や商店員の身分への転移)をおこなうという代価を払うのでなければ維持できなくなったとき、かならずこの職業世襲の縮小という事態がおこるわけである。」(Bourdieu [1979=1989: 200])

2.2. 社会移動研究との切断

以上のような方法論的観点に基づいた関係的思考様式、これが『ディスタンクシオン』の中で行われた分析の出発点をなしている(Bourdieu [1987=1988: 199])。この著書の中では、その分析を行うための理論枠組も提示されるのであるが、前節で述べたブルデューの関係的思考様式を、彼が提唱する理論との関連において捉え直すと、それは「社会空間(espace social)」の構築という形で表現される。この空間は、単に客体化された社会的位置関係を表わす物理的空間であるだけでなく、そこから「ハビトゥス」概念を媒介にして、実際の生活様式が知覚・評価される社会的意味生成空間でもあると想定される。「ハビトゥスを通して、われわれは、共通感覚の世界、自明と思われる社会的世界を持つわけです」(Bourdieu [1987=1988: 208])と述べられる。ブルデューは、この「ハビトゥス」の生産条件という観点から、経験的なデータと照合可能な最も均質な単位を再構成するために、次の三次元から規定される空間を構築する(Bourdieu [1979=1989: 178])。

(1) 経済資本、文化資本、社会関係資本も加えて、実際に利用しうる手段や力の総体としての資本の総量。

(2) 資本の総体が各種の資本間でどのような内訳になっているかという資本の配分構造(特に、経済資本の配分構造が文化資本の配分構造と逆向きに対称形をなす交差配列構造が強調される)。

(3) 社会空間における過去の軌道とこれからありうる軌道によって示される資本の量と構造の時間的変化。

また、実際に行行為者が産出するプラティック(慣習行動・実践)を説明するためには、次のことも考慮に入れなければならない(Bourdieu [1979=1989: 176-178])。

(4) 各資本がその効果を生み出す「界 (champ)」に特有の論理

このようにして、[(ハビトゥス) (資本)] + 界 = プラティックという公式に基づいた理論構成が提唱されるわけであるが (Bourdieu [1979=1989: 159]), この理論構成の意義と問題点については、多くの論者が指摘しているところである。たとえば、小内 (1995: 83-88) は、ブルデューの階級分類が従来の社会階層論と異なる点について、次の2点を取り上げている。(1) 経済資本、文化資本、社会関係資本といった異なる種類の資本を階級・階層分類の指標として用いるにあたって、それぞれを別々に取り扱うのではなく、それらの構造それ自体によって階級・階層分類を行っていること。(2) 「軌道」概念の背後にある移動のメカニズムに関する認識 (諸個人の自由な社会移動を前提しないこと、職業移動に限定しないこと、ハビトゥスの形成過程を浮き彫りにすること) が、従来の社会移動研究とは異なっていること。これら2つの指摘を方法論的な観点から言い換えれば、前者は、実体的思考様式に代わって関係的思考様式を採用すること、後者は、関係的思考様式の中に時間軸を導入することが、従来の社会階層・社会移動研究と異なることを意味する。

ブルデューは、以上のような方法で構築される社会空間を、特殊な構築作業をおこなうことによって作りだされるひとつの「抽象的表象」であると述べている (Bourdieu [1979=1989: 260])。ただし、この社会空間をはじめとする諸概念は、それら自体として、それら自体のために検討対象にされることはない。それらはつねに、経験的データとの照合が行われる。実際に観察される結果は、社会空間を構成する関与的諸特性の「配置構成 (configuration)」の表われとして解釈可能かどうかを検討される。「本書『ディスタンクシオン』」では、空間的にも時間的にもはっきりと位置づけられた対象、すなわち1970年代のフランス社会という対象についての複数の観察・測定方法が動員されており、量的な方法も使えば質的な方法も使い、統計学的方法もあれば民族誌的方法もあり、マクロ社会学的方法も用いればミクロ社会学的方法も用いるといった具合なのですが(これらの対立はいずれもまったく意味がありません)、理論的であると同時に分かちがたく経験的でもあるようなこうした研究過程の中で、今しがた挙げたような諸概念はいわば試され、テストされているわけなのです。」(Bourdieu [1990: 59-60])

それにもかかわらず、ブルデューは、社会空間を構築するに際して、従来の社会移動研究の枠組から「縁を切ること=切断すること (rupture)」を代償にしてしまう。その意味で、彼の社会空間の構築は、一方で、これまでの社会移動研究の制約にとらわれない独自の議論を展開していると考えられることができるが、他方で、社会移動研究との関連の中で、そこに見出される問題点を解決する方途を閉ざしてしまいかねないことになる。「こうして得られる社会界の表象=見取図は、次の二つのものと縁を切ることを前提としている。まずひとつは、社会界と言えばごく自然に頭に浮かぶ表象、つまり『社会的階梯 (l'échelle sociale)』という比喻に要約され、『上昇』や『下降』といったいわゆる『移動』にまつわる一連の日常用語によって喚起される表象と縁を切ること、そしてもうひとつは、社会空間の一次元的表象をそのまま採用することに満足できないからといってたとえば『社会的流動性』についての研究がおこなわれているようにこの表象をえせ学問的にあれこれと練りあげ、さまざまな指標 (それらは何にもまして構造破壊の道具である) を作りあげることによって多様な資本の総合をおこない、これによって得られるいくつかの抽象的な層 (アッパーミドルクラス・ロウアーミドルクラスなど) の連続体へと社会界を還元してしまおうとする、そうした社会学の伝統の全体と縁を切ることである。」

(Bourdieu [1979=1989: 189-190])

したがって、ブルデューの社会移動研究批判は、従来の研究の問題点を指摘し、そこからラディカルな切断を試みているものの、社会移動研究の枠組に対して具体的な変更をせまるだけの十分な手筈を整えているとはいいがたい。それに対して、社会移動研究の枠組を再検討する形で、その批判的な展開を試みようとしているのが、次に取り上げるメルリエの議論である。

3. メルリエにおける議論の展開

これまで述べたブルデューの議論に対して、メルリエは、彼の社会移動批判を配慮しつつ、そこに内在する問題を明らかにすることによって、関係的思考様式に基づいた社会移動研究を展開する可能性を探ろうとする。彼においては、ブルデューのように、「社会空間」といった理論的構築物の下に、従来の社会移動研究と「縁を切る」ことはしない。むしろ彼は、従来の社会移動研究で用いられた問題提起、調査方法、分析手法が持つ社会的意味と、それがもたらす対象構築様式の効果について批判的検討を試みる。特に彼は、移動表の分析などに使用される、カテゴリー分類の形式的特徴が結果に与える影響について大きく問題に取り上げる。

3.1. 移動表におけるカテゴリー分類の問題

ふつう移動表は、職業に関する同一のカテゴリーシステムで表現される二つの変数を組み合わせたものなので、実際に見出される移動の大きさは、使用したカテゴリーシステム（つまりカテゴリーの数とその相対的大きさ）によって影響を受ける。たとえば、「移動」または「非移動」の比率によって2つの異なる移動表を比較する場合、これらのカテゴリーシステムが異なっていれば比較の意味をなさなくなる。また、たとえカテゴリーシステムが形式的に同一であっても、各々のカテゴリーおよびカテゴリー間の差異の社会的意味が一定であるかという問題が残される。このようにして移動表の内容についての意味は、そこに導入される社会的分類の意味によって影響を受けている。それゆえ移動表による結果を解釈するためには、その中で用いられる分類一般とその重複（世代間の異なる時点に同一の分類を適用すること）に固有の効果を考慮する必要がある（Merllié, Prévot [1991: 39-40]）。

移動表におけるカテゴリー間の個人の動きは、個人の移動に関する情報だけではなく、構築した移動表によってカテゴリー間に仮定される社会的境界の不安定さについても知らせてくれる。その不安定さを作り出す要因としては、父親の職業が子供の記憶に依存しているなどの質問の回答条件によるものと、時点が異なると職業の社会的意味が違ってくるなどの社会構造の変化によるものが考えられる。前者については、メルリエ（1983, 1990b）は、大学生が年次当局調査（l'enquête administrative annuelle）に毎年記入する保護者の職業を分析することによって、パネル調査から得られた学生の社会的出自に関するデータに不安定性が見られることを明らかにしている。また、後者については、カテゴリー間の量的関係として把握される社会構造が変化すると、それと同時にこれらのカテゴリーに属することの社会的意味（すなわちそのメンバーの社会的地位）も必然的に変化することが挙げられる。たとえば、「最上位」と見なされるカテゴリーは、その量的増加を伴うと相対的に中間的な地位に衰退する以外になく、それと同時にその同質性が減少する可能性がある。それとは逆に、農業のようなカテゴリーは、その数がたえず減少しているが、それだけその上位の層に集中する傾向があるので、むしろそ

の社会的地位が上昇し、その多様性が減少するのを見ることができる (Merllié [1994 : 111])。

そこで、少なくともこの後者の構造的変化を考慮に入れながら、移動表の行と列におけるカテゴリ分類を比較可能にするためには、次のような分類の原理を考案しなければならないとメルリエは提唱する。それは、たとえ指標として職業を用いるとしても、職業形態によって定義されるカテゴリを反映するのではなく、それと等価の相対的な間隔システムを反映した分類の原理を持つことである (10%が「上位」で、次の10%がそれに続くといった十分位法のように)。その結果、職業集団において「移動しない」個人は、もしその職業が相対的分類の中で位置が変わったとすれば、社会的地位においては必ずしも「移動しない」ことにならない (また逆に「移動した」個人にとっては、その職業カテゴリが変化すれば、全体の構造の中でその位置が変わらないこともある)。もっともこのような分類は、所得のように統計的に容易に操作可能な量的変数ならば可能であろうが、職業のような変数を用いて行うことは明らかに困難が予想される。(Merllié [1994 : 113])

以上のように、移動表の分析結果は、そこに用いられるカテゴリの選択により異って表れる可能性があるのだが、実際のところ、そのカテゴリを選択する基準は、社会移動に関する様々な問題意識や研究の立場を反映している。たとえば、性別、国籍、就業の有無などによるサンプル構成の偏りが、カテゴリの選択基準に否応なく制約を与える。あるいは、社会移動が垂直移動として理解され、社会的地位に関するカテゴリが一次元ヒエラルキーによって構成されるという前提が、カテゴリ分類の意味に含まれることがある。上昇移動と下降移動の間を明確に区別するという問題意識を持つかぎり、さらには職業威信尺度を作成しようとするかぎり、このヒエラルキーの一次元性はあらかじめ確保されることが要求されるのだが、しかし注意を要するのは、「カテゴリの社会的分類それ自体の意味に関する問題は、移動表の分析の中でこの分類がもたらしうる結果から区別しなければならない」(Merllié [1994 : 196]) ことである。実際、たとえカテゴリがヒエラルキー的に秩序づけられるにしても、またその秩序の原理が何であるにしても、カテゴリの分類とそこに集められる個人全体の分類との間には飛躍が存在する。たとえば、ある特定の社会において、事務員の社会的地位が労働者のそれよりも高いと総じて受け入れられても、だからといってこのことは、すべての労働者とすべての事務員の相対的地位を決定するわけではない。ゆえにヒエラルキーの一次元性を仮定する移動表の論理は、あるカテゴリから別のカテゴリへとわたる共通の社会的意味を押しつけることによって、カテゴリ間の比較とそこに集められる個人の比較との違いを誤認するか、少なくとも無視することになる (Merllié [1994 : 196])。

3.2. 社会移動研究の歴史的検討

これまで見たように、移動表の分析には、カテゴリ分類をはじめとする種々の制約条件が見出される。にもかかわらず、なぜ社会移動研究は、この移動表の分析を中心に発展することになったのだろうか。メルリエは、その社会的文脈を明らかにするために、社会移動研究の歴史にさかのぼった検討を試みようとする。「移動表の内容に関する解釈が自明のものでない」とすれば、移動表が語りうることは、何よりもまずその経験的内容を作り出す『データ』の性質によって条件づけられる。したがって、移動表が分析する情報の構成について問題にしなければならない。すなわち、データの収集方法と分類やカテゴリ化の方法についてである。その場合、その賭金を明らかにするために、歴史が有効なレバーとなる。……もし社会移動のテーマ

が、統計的道具化の中に溶解する傾向があるとすれば、こうした移行がどのような文脈の中で、いかにして起ったのかを研究することによって、事柄がはっきりするのである。」(Merllié [1994 : 115])

メルリエは、第一次世界大戦以前においてすでに、まだ「社会移動」と呼ばれていないものを測定し、その主題に対する仮説の検証に向けられた、数々の調査技術と統計的分析法が作り出されていたことを示している。「1900年にパリ社会学会によって行われた『職業伝達』に関する体系的観察への依拠は、たとえそれが直接の解答を引き出さなかったと思われるも、以後に続く年代の中でかなりの反響に出会うことになった。というのも、社会移動表は、いくつものヨーロッパ諸国の中で、十分互いに独立したやり方で作られるようになるからである。これらのプロブレマティックは多岐にわたっている。それらは特に、ピアソン (K. Pearsom) とその共同研究者による能力の生物学的遺伝に関する研究、ラピー (P. Lapie) による社会的正義のオペレーターとしての小学校の役割に関する研究、チェッサ (F. Chessa) による労働市場の作用条件に関する研究の中に根づいている。研究対象となる母集団も多様である。つまり、伝記資料から集められた歴史上および現在の著名な人物、地方の情報提供者によって熟知された地方共同体、官庁統計による公式文書に基づいて研究された都市共同体などである。分析技法もまた同じく多様化している。たとえば、ピアソンの『相関係数』による総合的測定、ラピーにおける『安定』と『不安定』に関する比率の比較、チェッサにおけるカテゴリーごとの『類似性』の指標などである。」(Merllié [1994 : 146] [1995 : 28])

また、その後ソローキンが「社会移動」という用語を普及させ、社会移動研究という領域を確立するまでには、パレート (V. Pareto) による「エリートの循環」の研究、デュモン (A. Dumont) による「社会的毛管現象」の研究、ラプージュ (G. V. Lapouge) とアモン (O. Ammon) による社会的ダーウィニズムの研究、ガルトン (F. Galton) の「才能の遺伝」に関する研究、ブーグレ (C. Bouglé) の「平等の理想」に関する研究、ブルジュ (P. Bourget) の『発展段階 (L'Étape)』という社会学的小説などが存在する。ソローキンは、彼が統合する研究領域の中でこれらの研究を融合させながら、それらの理論とプロブレマティックの要点をまとめるのであるが、それらは単に彼の著作の資源として検討されることに役立つのではなく、彼以降の研究の中にも貫通するイデオロギーの背景を実際作り出すことになる (Merllié [1994 : 22])。「確立されるべく、また評価・算定されるべく作り出された『社会移動』は、個人の『メリット』に基づいた社会的位置への『自由な』アクセスを代償に社会的位置の不平等を受け入れる『平等』または『メリトクラシー』のイデオロギーと、自然法の必然的表現としての社会的『特権』を保守する伝統主義的反イデオロギーとの葛藤の中で、なかんずく一つの賭金をなしている。……これらの理論やイデオロギーが想定する社会に関する様々な視点が、両者の間で不均等に両立している。……これらの多様化した関心の中心部を取り入れることができた点に、ソローキンの著作の力量がある。」(Merllié [1994 : 42-43])

メルリエによれば、以上の歴史的検討による迂回は、1927年にソローキンが著した『社会移動』の中で提示された用語と主題を理解するためだけでなく、そこで文字通りの社会移動研究の出発点を作り出すような成功をとげた理由を理解するためにも必要とされる。しかし、同時に彼の成功はまた、それ以前に行われた研究の多様なプロブレマティック、調査対象、分析技法を制限することによって確立されたことも指摘される。「社会移動研究は、彼の著書においてその目的の社会学的設立および正当化を見出すとしても、それでもこの研究は、その社会的正

当化として直接現れたり表現されたりする以前のプロブレマティックと、多様なやり方で連絡をとり続けている。しかし、この成功は、ソーキンが社会移動研究に開いていた領域のかなり多大な制限を代償にして獲得されたという事実も考慮しなければならない。この領域の囲い込みは、ソーキンが多様な諸要素を通してこの領域を確立し、命名することを発端とするが、それはこの制限を含意する統計的技術の使用によって倍化される。」(Merllié [1994: 44])

まず、イデオロギー的制限として、ソーキン以後の社会移動研究は、機会均等による公正の理想と、社会・経済的効率の要請との双方が結びつくことによって正統化されてきた(Merllié [1994: 47])。社会移動に関する社会学的主題は、社会政策に及ぶ可能性のある社会政治的争点に直接結びついて出現したために、この主題は、計画化の中に表現される社会工学の論理と、それを明らかにするための「社会的指標」の構築にエネルギーが注がれた(Merllié [1994: 48])。この視座の中で社会移動は、中心的で、曖昧で、把握不可能なものとして現われる。中心的というのは、社会移動が社会の社会経済的理想を反映していること、曖昧というのは、社会移動がネガティブな形態(技術発展が引き起こす社会的地位下落)をポジティブな形態(民主化による社会的地位上昇)として捉えていること、把握不可能というのは、社会移動が特定の指標よりも総合的な指標を取り上げたことである。ソーキン以前の大部分の主題は、それ以後、「社会的指標」による政治・行政的言語の中に書き改められることになる(Merllié [1994: 51])。

次に、技術的制限として、「社会的指標」の論理が、技術的な視点からすれば容易に観察可能な変数を選択することが挙げられる(Merllié [1994: 51])。ソーキンにおいては、社会移動はまだ職業移動に限定されていなかったが、それ以降、(1)領域の制限：社会移動＝職業移動とみなす、(2)情報手段の制限：統計的手法が記録可能なものだけを取り上げる、という2つの制限がなされていく(Merllié [1994: 54])。社会移動を分業による職業システムの中の表現に同一化することは、ソーキンの理論的扱いから調査による経験的扱いへの移行の特徴であるが、それはソーキンによる研究領域の基礎に、彼以後の経験的研究を結びつける連続性を制限する一つになる(Merllié [1994: 56])。

3.3. 「構築される」社会的現実

おおよそ以上のような概観をもつ歴史的検討の結果、メルリエは、移動表の分析を中心とする社会移動研究によってもたらされる結果は、客観的に「与えられる」のではなく、研究者によって「構築される」という立場をとるにいたる。この彼の立場は、次のように説明されている。「先行する大部分の分析は、社会移動調査の機械が、そこで挽くために注がれる原料の性質よりも、その歯車の形態に依存した小麦粉を生産するという考えに到達する可能性がある。このことについて何も驚くにあたらない。つまり、あらゆる知識の操作は、用いられた(精神的・技術的)道具に依拠しているので、われわれは道具の構築を吟味することによって、その道具が対象の構築に貢献していることを確認する以外になかったのである。このことはまた、最も『広範な』質問紙調査にも、最も『深く入った』エスノグラフィックなモノグラフィーにもあてはまる。したがって、調査による『社会移動』が、イデオロギー的—社会学的—統計学的構築、すなわち学問的構築による産物であると言うことは、何もショックなことではない。このことが意味するのは、まず、『結果』が『与えられる』のではなく、『構築される』ということ、次に、科学的実験結果が実験の再生を可能にする手順を伴わない限り意味をなさないのと同様、『結果』を完全に提示するには、それを導き出す仮説や技術に立ち返って理解しなければなら

ないことである。」(Merllié [1994 : 206])

ちなみに、この彼の立場は、ブルデューらが『社会学者のメチエ』の中で、バジュラルの議論を参照して「**事実は勝ち取られ、構成され、事実として確立される**」(Bourdieu, Chamboredon, Passeron [1973=1994 : 118])と主張する、「**適応合理主義**」の考え方に通底しているように筆者には思える。たとえば、この考え方の特徴として、次のような記述が見られる。「**適用合理主義が自生認識論〔常識や先入観と連続しながら成立している認識論〕との結びつきを断つのは、何よりも理論と経験の間の関係を逆転することによってである。実証主義は、最も初歩的な科学的操作である観察について、観察に理論的前提を持ち込まないほど、より忠実に現実を記録できるものとして記述してきた。しかしながら観察は、それがどんな理論の原理を駆使しているのか、その原理が自覚されるほど、そしてその前提が体系的であるほど科学的なものになる。〕**」(Bourdieu, Chamboredon, Passeron [1973=1994 : 121]) こうした考え方は、メルリエが行う研究にもそのままあてはまると考えることができる。

メルリエは、社会的地位、階層、移動といった諸概念を用いる中でさまざまな困難に会うとしても、そこからこれらの概念が、うまく折り合うにはあまりにも複雑な社会的現実によく適応しないと結論するのでは不十分であると指摘する。つまり、もし社会的現実が複雑で、捉えどころがなく、社会学者の構築に逆らうのだとすれば、それは社会的現実がそれ自体「与えられる」のではなく、社会的行為者間の相互作用の中で「構築される」ことに注意を向けなければならない。「**社会的現実の学問的構築は、社会的現実の一特殊形態以外の何ものでもない**」(Merllié [1994 : 206])と考えられる。たとえば、被調査者が社会移動について自ら抱く表象が、調査の中では、統計学者が「**バイアス**」と考えがちな固有の効果を作り出すことが確認されるとしても、何も驚く必要はない。より一般的に言えば、調査計画に攪乱をもたらす、あるいは多少とも転覆をもたらすあらゆるものは、知識に対する障害として分析されてはならないばかりか、知識の対象として直接考慮に入れることが可能であると考えられる。対象を把握する上での調査の困難さは、それだけその対象に関する情報を与えてくれるわけである(Merllié [1994 : 207])。

この考えに立てば、移動表を構築する際に提示した目的に対して、その結果がうまく適応しないことが確認されたとしても、それはこの目的についての分析を可能にすると同時に、そこから引き出される結果を別の観点から再解釈することを可能にする。たとえば、社会移動の概念を作り出す空間のメタフォールに基づいた移動表の分析が、カテゴリーのヒエラルキー化に関して、またカテゴリーを分け隔てる「**距離**」の性質に関して疑わしい特徴を示したとしよう。そのような時でも、だからといってその結果はあらゆる意味を失うわけではない。逆にある意味では、カテゴリー間の移動の相対的大きさを、カテゴリーを分け隔てる「**社会的距離(distance sociale)**」の指標と見なすこともできるし、事実それらのカテゴリーを区分する差異化の指標と考えることもできる。構築によってあらかじめ知ることのできるカテゴリー間の「**距離**」を越えるのは、決して個人そのものではなく、カテゴリー間の個人の流れであり、この流れが、カテゴリーを分け隔てる変動可能な「**距離**」を特徴づけることになる。したがって移動表は、移動する(あるいは移動しない)個人についてよりも、そこで用いられるカテゴリーの内容に関する貴重な情報手段になる(Merllié [1994 : 208])。

こうしてメルリエは、移動表は個人の移動の大きさを測定するよりも、カテゴリーの間で変化する「**社会的距離**」の程度を際立たせるための分析に適していることを強調する。実際、移

動の構造的変化と移動そのものの流れは、カテゴリー間の「社会的距離」を縮小する効果を持つ可能性がある。たとえば、農民層の流出によって、社会的地位がその上位部分に均質化されるようになったり、あるいは逆に、進学率の上昇に伴ってポストが増加した、大学教授の地位が低下したりするケースを挙げることができる。その意味において、個人の動きはカテゴリー間の「社会的距離」を知る上での重要な情報源となり、その個人の動きの下に、変容するカテゴリーの動きを見る必要がある。メルリエにおいては、移動表の中では、個人がカテゴリーの間を動くと同時に、カテゴリーが個人の間を動くのだと考えられる (Merllié [1990b : 1328], Merllié, Prévot [1991 : 45-46])。

最終的に、実際の分析の中でメルリエに求められるのは、当該社会において関与的な、社会的に有意義なカテゴリー間の関係、およびその体系としての構造を構築することである。そのためには、カテゴリーシステムを作り出す調査・分析道具と、それが使用される社会的・科学的諸条件に対して、注意深い反省をうながす必要がある。カテゴリーの忠実さが変化することは、社会的現実を測定あるいは記述するシステムとしてのカテゴリーの純粋に技術的な特徴なのではない。移動表から予想される情報の中に雑音が入り込むように見え、ゆえにその分析を混乱させるように見える統計的観察の諸条件は、単なる測定のノイズではなく、現実の社会的メカニズムをも反映する。したがって、統計的カテゴリーの利用によって出される実際上の問題は、その定義の複雑さの中にも、調査様式に対する結果の敏感な反応の中にも表われるが、この問題は、カテゴリーに結びついた賭金を明らかにでき、また、調査の中だけでなく、他の社会状況の中にも作用する社会的メカニズムを明らかにできる限りにおいて、社会的な関心を持つことになる (Merllié [1989 : 153])。

4. 教育と社会移動研究との関連

これまでの議論を要約しておくことにしよう。ブルデューは、従来の社会移動研究の多くが実体的思考様式に依拠しており、そこでは指標の名目上の同一性に起因して直観主義と要素還元主義に陥る危険性があることを指摘した。この実体的思考様式に代わって、彼は要素間の関係それ自体を取り上げる関係的思考様式に移行する必要があることを主張した。それを理論的に顕現させたものが、「社会空間」という概念であるが、彼はこの理論的構築を企てる際に、従来の社会移動研究とは「縁を切る」ことを代償にしてしまう。それに対してメルリエは、社会移動研究に内在する問題を批判的に検討することによって、関係的思考様式に基づいた社会移動研究を展開する可能性を探ろうとする。そのために、これまで移動表の分析を中心としてきた社会移動研究の制約条件を歴史に遡って明らかにしながら、移動表などのカテゴリー分類における、社会的に有意義な関係を「構築する」ことをめざす。

さて、教育と社会移動研究のテーマにおいて、以上に述べたような関係的思考様式はどのように適用することができるのだろうか。たとえば、この下位領域において最も頻繁に引用されるブルデューの文献は、『再生産』(1970)と「文化的再生産と社会的再生産」論文(1971)であるが、これらの文献の中では、次のような実体的思考様式に対する批判の文章が記されている。ここで「教育システム」とは、一定の制度的諸条件が存在し存続する形で制度化されたシステムのことを表わす (Bourdieu, Passeron [1970=1991 : 82])。

「現実に忠実だという外見の下に、目にみえる対象一選別れた人口を考慮せずに規定された就学人口一に関わるとする、観察された諸関係の経験主義的解釈を進めるなら、もろもろの経験的变化を体系的に説明するのが不可能になる。…教育社会学は、就学人口と制度の構造またはその価値のシステムを別々に研究し、あたかも二つの実体があって、両者が関係づけられる前からそれらに固有の特性が存在しているかのように扱い、こうした無意識の自律化によって、最終的には、生徒の文化的『願望 (aspirations)』とか、教授の『保守主義』とか、両親の『動機づけ』といった単純な本質にただもう頼ってしまうことがある。このようなとき、この教育社会学がどれだけ完全な誤ちと申し分のない欠落を示すか、数え上げればきりがないだろう。教育システムと社会諸階級間の関係の構造のあいだの関係のシステムを構築すること、それによってのみ、これら物象化している抽象を避け、就学チャンス、学校への態度性向、学校文化への距離、選別の度合のような相関的概念をうみだすことができるのだ。」(Bourdieu, Passeron [1970=1991: 131-132])

「直接アクセス可能な諸要素、すなわち個人のところで止まってしまう実体的思考様式は、これらの諸要素が社会的に適切なあらゆる決定を引き出すもになる関係の構造を無視することによって、現実に対するある種の忠実さを強調する。また、この思考様式は、階級間の関係の構造の再生産を保証する傾向をもつメカニズムに関する研究を犠牲にして、世代内または世代間移動の過程を分析しなければならないと自認する。つまり、個人の上昇によって、またそのために注意深く選択・修正された限定的な個人カテゴリーの統制された移動が、構造を永続させることと両立できないわけではないこと、そして民主的理想に基づく社会において唯一考えられるやり方においてさえ、社会の安定に貢献することが可能であり、それによって階級関係の構造を永続させることに貢献するかもしれないこと、以上のことに実体的思考様式は気がつかないのである。」(Bourdieu [1971=1977: 487])

以上の文章から、教育と社会移動研究における実体的思考様式の問題点として、(1)直接観察可能な目に見える要素のレベルに分析がとどまること、(2)特に個人の属性や意識のレベルで説明が企てられること、(3)教育システムと他の下位システムや階級・階層構造とを個別に切り離して扱うこと、の3点を挙げることができる。これらの実体的思考様式の問題点を解決するためには、教育システムと他の下位システムおよび階級・階層構造との関係の構造に注目しなければならない。つまり、特定の個々の要素に注目するかぎり、そのものとしては目に見ることのできないそれらの関係の中で、就学行動、選別行為、再生産戦略などの実際のプラティックが産出されるメカニズムを明らかにすることが必要になる。

この関係的思考様式の立場から、教育と社会移動の関連について問題にすることは、前者を後者の原因として還元することを強制しない。あるいは逆に、教育システムが制度として確立した社会においては、社会移動が教育システムと全く無関係に規定されることも考えられない。そこで、教育システムと他の下位システムおよび階級・階層構造との関係が問題にされなければならないのであるが、その場合、「教育システムの相対的自律」という考え方が中心的な位置をしめる。たとえば、教育システムと経済システムとの関係を問題にする場合、次のような分析を行うことが必要であると述べられる。「教育システムに特有のロジックは教育システムがそれ自身の再生産という至上命令に従って自らを組織する方向にみちびく。しかもこのロジックは教育システムが技術的再生産機能を果たすようにまえて仕向けるものである。ここに教

育システムと経済装置との関係、とりわけロジックを異にするそれぞれの構造がきわめて異なる寿命をもつことに由来する構造間の緊張関係を分析するための必要条件が明瞭になる。すなわちそれは、教育システムを相対的に自律的な領域とし、その内部法則を分析するというものである。」(Bourdieu, Boltanski [1975=1985: 64])

この「教育システムの相対的自律」は、他の下位システムとの関係によって階級・階層構造の再生産に寄与することもあれば、必ずしもそうならないこともある。一方で、ブルデューは、『再生産』において、「教育システムが相対的に自律的な、象徴的暴力の正当的行使の独占者である制度として手中にしている制度的諸手段はさらに、中立性¹⁾の見かけの下に教育システムがその文化的恣意の再生産につとめている集団または階級に役だつように、あらかじめ傾向づけられている」(Bourdieu, Passeron [1970=1991: 97]) とする「独立による従属」の側面を強調する。他方で、彼はまた、それ以降に発表した著作(Bourdieu, Boltanski, Saint Martin[1973], Bourdieu, Boltanski [1975=1985], Bourdieu [1978], Bourdieu [1979=1989]) の中では、教育システムと他の下位システムとの間に生じる「構造的齟齬」を基盤として、行為者が社会構造における自分の位置を維持しようとしたり変化させようとしたりする、様々な「戦略」を重視するようになる。たとえば、学歴から得られた肩書をフルに活用して、様々な相談業、案内業、教育業といった、新たな産業ポストを作り出すようなケースが挙げられる。もっともこうした「戦略」も、先行者の正統性を承認して(それへの抵抗も承認の一形態にすぎない)その後を追従する形になる場合には、その時間の秩序によって分かれたる順序関係を全体として維持することに貢献する(Bourdieu [1979=1989: 252-258])。

「教育システムの相対的自律」の問題に関しては、メルリエもまた、ブルデューと同じくその重要性を次のように記している。「家庭の外部に教育システムが発展し、それが一般化した社会においては、学校教育は必然的に、社会構造の中の個人の配分メカニズムにおける固有の役割を演じるようになる(これはソローキングが発展させた主題の一つである)。分析の賭金[争点]の一つは、確立した制度として、他の諸制度、特に家庭に対する相対的自律を持つ学校組織が、どの程度、家庭による社会的地位伝達の一連のメカニズムを修正する傾向を持つか(たとえば『平等な』方向にとか『保守的な』方向に)を究明することである。」(Merllié [1994: 209], Merllié, Prévot [1991: 108])

彼によれば、社会移動に対して学校教育は、常に必要でもなければ常に十分でもない手段を提供することができ、直接には社会移動を引き起こすことのない経路を提供する可能性がある(Merllié, Prévot[1991: 110])。さらに学校教育の方が、社会構造よりも急速に変化する可能性があり、このことは学歴と社会的地位の関係を不安定なものにし、それらの諸関係についての認識を混乱させることになる。この「構造的」と呼ばれる発展は、いくつかの特定時点をとれば雇用よりも就学のほうが早く進むので、その結果、一定の職業につくために必要な学歴上の諸条件は、次のような形で急速に変化することが考えられる。「より高い教育水準へのアクセスが一般化する傾向は、個人の社会的運命に関していえば、矛盾して現れる可能性のある一つの効果をもたらす。一方では、同一の学歴においては、それに対応する社会的水準が相対的に低下するのを観察することができ、その結果、受けた教育がますます社会的水準を決定しなくなる可能性がある。…他方では、ますますその数を増す社会的カテゴリーへのアクセスが、入学者の社会的出自を大きく制限できる学校によって発行される、非常に特定の資格の条件に従属する可能性がある。」(Merllié [1994: 211])

ブルデューとメルリエに共通していることは、相対的に自律した教育システムと他の下位システムや階級・階層構造との関係の中で、どのような意味あるカテゴリー関係が構成されるのかを解明しようとするところにある。つまり、どのような社会カテゴリーの区別が、社会移動の障壁を作ったり壊したりする上で、関与的な賭金・争点になっているのかを明らかにすることが重要になる。たとえばブルデューは、旧来のフランスの教育システムにおいては、非常に明確な境界をもって、社会的分割にはっきり対応する学校制度上の分割をその内部に取り込んでいたのに対し、今日のシステムにおいては、分類が不明確で混乱しており、様々なルートが微妙な形でヒエラルキー化されていることを指摘している。「今日のシステムは、競争試験の無慈悲な厳しさに象徴される旧システムほど厳格でも強引でもないしかたで、『志望水準』を難易度や学校レベルに無理やり合わせるように強いることにより、それ自体がもともと不明確で混乱している志望を（少なくとも学校空間の中間的水準においては）助長しあるいは許容している。」（Bourdieu [1979=1989: 239]）そして、「学校生活と職業生活、職業生活と退職後のあいだの、全か無かという乱暴な断絶の代わりに、今度はそれとわからないほどのきわめて小さなずれによる移行がおこる」（Bourdieu [1979=1989: 241]）と指摘する。

このように「教育システムの相対的自律」という観点から、社会学的に有意義なカテゴリー関係を構築しようと努めることによって、そこに見出されるカテゴリー間の様々な「社会的距離」を問題にすることができる。この点に関係的思考様式を教育と社会移動研究に適用する一つの可能性を見出すことができる。相対的に自律した教育システムを通して、どのような「社会的距離」が短縮したり遠ざかったりするのか、それによって社会的関係の意味にどのような変容が見られるのか、そうした問題に焦点を当てた分析を行うことが、教育と社会移動研究における一つの重要なテーマになると筆者は考える。

5. 開かれたプロブレマティック

本稿では、これまでブルデューとメルリエらが中心となって展開した関係的思考様式に基づく経験的研究の方法論と、それを教育と社会移動研究に適用する可能性について論じてきた。最後に、彼らが提唱する関係的思考様式の実際の適用は、特定の問題領域の中に閉じられるのではなく、複数の問題領域に対して開かれたプロブレマティックを志向してなされることを指摘しておきたい。前節で示したような「教育システムの相対的自律」の問題は、教育システム内部の問題にとどまるのではなく、他の様々な下位システムや社会構造全体との関係の中で論じられるからこそ、意味を持つことができる。

これまで、とりわけ教育と社会移動を扱う下位領域においてブルデューの研究が参照される場合、「文化資本」の世代間伝達による「文化的再生産」の問題を取り上げることが多かった。この研究がインパクトを持ったのは、それが階級・階層構造の再生産に貢献する隠蔽された（あるいは正統化された）側面に解明の糸口を与えたからであった。その意味において、「文化的再生産論」は、「階級・階層と文化」の関係という、一つの重要な関係をクローズアップした研究であると言える。

しかし、「階級・階層と文化」の关系到焦点を当てた研究は、それでもやはり一つの関係を強調しているにすぎない。この問題だけを個別に切り離して論じってしまうと、今度は逆に、他の様々な諸関係を覆い隠してしまうことになる。たとえば、教育を通した文化伝達を念頭に入れ

るかぎり、「教育システムの相対的自律」の問題は、「階級・階層と文化」の問題とは切り離して論じることのできない関係にある。ブルデューの概念を借りて一般的に言えば、「文化資本」がその効果を生み出す「界」に固有の論理が考慮されなければならないからである。「界の数と同じ数だけ利害の形もある」(Bourdieu [1987=1988: 81]) わけである。

したがって、教育と社会移動の問題をめぐってブルデュー、メルリエらの議論を参照する際、「階級・階層と文化」の関係は無視できない一側面ではあるが、そこに問題が限定されなければならない必然性はない。「教育システムの相対的自律」の考え方を持つことによって、教育と社会移動研究は、たえず他の諸研究領域の問題に出会う可能性がある。そこでは、「文化資本」のような概念や指標は、教育システムのような「界」を構成する社会的関係に関与する諸特性の一つとして検討される。そして、他の関与的諸特性との関係の中で、また他の「界」や社会構造との関係の中で、研究者がデータに基づいて構築した社会的関係の意味をさらに比較検討する方向に導かれる。本稿の試みは、そのための準備作業として位置づけることができる。

文 献

- Bourdieu, P., 1971, <<Reproduction culturelle et reproduction sociale>>, in *Information sur les sciences sociales*, 10, 2.=1977, "Cultural Reproduction and Social Reproduction", in Karabel, J., Halsey, A. H.(eds.), *Power and Ideology in Education*, Oxford University Press, pp. 487-511.
- , 1978, <<Classement, déclassement, reclassement>>, in *Actes de la recherche en sciences sociales*, 24, pp. 2-22.
- , 1979, *La Distinction : Critique sociale du jugement*, Minuit.=1989, 石井洋二郎訳『ディスタクシオン I』新評論
- , 1980, *Questions de sociologie*, Minuit.=1991, 田原音和監訳, 『社会学の社会学』藤原書店
- , 1987, *Choses dites*, Minuit, =1988, 石崎晴己訳, 『構造と実践』新評論
- , 1990, 加藤晴久編, 『ピエール・ブルデュー—超領域の人間学—』藤原書店
- , Passeron, J. C., 1970, *La Reproduction : Éléments pour une théorie du système d'enseignement*, Minuit. =1991, 宮島喬訳『再生産—教育・社会・文化』藤原書店
- , Chamboredon, J. C., Passeron, J. C., 1973, *Le métier de sociologue ; Préalables épistémologiques* (deuxième édition), Mouton.=1994, 田原音和, 水島和則訳, 『社会学者のメチエ—認識論上の前提条件—』藤原書店
- , Boltanski, L., Saint Martin, M., 1973, <<Les stratégie de reconversion ; Les classes sociales et le système d'enseignement>>, in *Information sur les sciences sociales*, 12, 5, pp. 61-113.
- , Boltanski, L., 1975, <<Le titre et le poste : rapports entre le système de production et le système de reproduction>>, in *Actes de la recherche en sciences sociales*, Mars,=1977, Nice, R.(trans.). "The Educational System and the Economy : Titles and Jobs", in Lemart, C. C.(ed.), *French Sociology; Rupture and Renewal Since 1968*, Columbia University Press, pp.141-170. =1985, 森重雄訳「教育システムと経済—学歴—

- 資格と職業—」『現代思想』11月号, pp. 63-71.
- 小内透, 1995. 『再生産論を読む—バーンスティン, ブルデュー, ポールズ=ギンティス, ウィリスの再生産論—』東信堂
- Merllié, D., 1975, <<Psychologie et mobilité sociale>>. in *Actes de la recherche en sciences sociales*, mai, pp.94-105.
- , 1983, <<Une nomenclature et sa mise en œuvre>>, in *Actes de la recherche en sciences sociales*, 50, pp. 3-47.
- , 1985, <<Analyses de l'interaction entre variables : Problème statistique ou sociologique ? >>, in *Revue française de sociologie*, 26, 4, pp. 629-652.
- , 1989, <<La construction statistique>>, in Champagne, P., Lenoir, R., Merllié, D., Pinto, L., *Initiation à la pratique sociologique*, Dunod, pp. 101-162.
- , 1990a, <<Les classements professionnels dans les enquêtes de mobilité>>, in *Annales ESC*, 55, pp. 1317-1333.
- , 1990b, <<Les catégories socioprofessionnelles à l'épreuve de la réitération : Une mesure de la fidélité du classement dans une enquête administrative>>, in *Population*, 46, 6, pp. 1037-1064.
- , 1994, *Les enquêtes de mobilité sociale*, PUF.
- , 1995, <<Les travaux empiriques sur la mobilité sociale avant la Première Guerre Mondiale>>, in *Revue française de sociologie*, 34, 1, pp.5-32.
- et Prévot, J., 1991, *La mobilité sociale*, La Découverte.
- 水島和則, 1994, 「訳者あとがき」, in Bourdieu, P., Chamboredon, J. C., Passeron, J. C., 1973=1994, pp. 484-501.

Une applicabilité du mode de pensée relationnel aux études de l'éducation et mobilité sociale —En suivant les travaux de Pierre Bourdieu et Dominique Merllié—

Atsumi OMAE *

RÉSUMÉ

Cet article a pour objet d'examiner une applicabilité du mode de pensée relationnel de Pierre Bourdieu et Dominique Merllié aux études de l'éducation et mobilité sociale.

D'une part, Bourdieu propose qu'il faille substituer le mode de pensée relationnel au substantialisme que supposent beaucoup de travaux de mobilité sociale. Pour adopter celui-là, il a construit théoriquement l'«espace social». Mais en compensation, il a fait une «rupture» avec la représentation de la mobilité sociale.

D'autre part, Merllié tente de trouver la possibilité des enquêtes de mobilité sociale en examinant le fonctionnement de leurs outils. D'abord, il remonte plus haut dans l'histoire de la discipline. Ensuite, il s'efforce de «construire» des relations sociologiquement significatives, par exemple, dans le classement des catégories des tableaux de mobilité sociale.

Concernant les études de l'éducation et mobilité sociale, ce mode de pensée relationnel a rapport au problème sur l'«autonomie relative du système d'enseignement». Il est ainsi possible de demander, au travers de cette autonomie, comment raccourcir ou s'éloigner les distances sociales et comment varier les significations des relations sociales.

* Division of Foundations